



# みち 古道が紡ぐ物語



## 自然に分け入る曾爾・御杖・美杉の道

～伊勢街道編④～

墨坂神社（宇陀市）の赤い鳥居を過ぎると、伊勢本街道は宇陀川支流に沿って山々の自然の中をたどります。今は、国道 369 号線として近代化された道が通るものの、古道は、それを離れては、また合流を繰り返す、田畑、木立の間を抜けていくつもの峠を越えていきます。

明治期以降、かつては宿場が連なっていた伊勢本街道も時代の流れに徐々に遅れるようになりましたが、ゆったりと時間が流れる分、常夜灯や道標、沿道の旅籠や茶屋の名残が随所に残り、さらに、木立に消え入りそうな道など、古道の姿をそのまま垣間見ることができます。

### かつての伊勢本街道の姿を今に残す

榛原の萩原宿を抜けた後、伊勢本街道は、国道 369 号線を縫うように険しい山間部をたどる。

榛原から内宮まで、その距離は約 100km と本街道が最短であるものの、江戸時代には、萩原宿の札の辻から別れた、比較的平坦な「青山越え」の道が参勤交代などによく利用された。また、1930（昭和 5）年には大阪上本町から伊勢方面を結ぶ鉄道（現近鉄大阪線・山田線）が全通したことから、伊勢本街道の宿場町は次第にその役目を終えることとなった。

ただ、開発の波には取り残されたものの、その分、常夜灯や道標が数多く残り、かつての伊勢本街道の姿を最も残す区間といえる。

### ひっそりとした山間の宿場町を進む

墨坂神社から宇陀川支流を上ると、榛原区檜牧ひのみきの山際に「弘法大師の清浄水」の看板を掲げる赤い小屋が建つ。弘法大師が行脚の途中に掘り開いたとされる清水で、千百数十年の間、地元の人々や伊勢詣の旅人の喉を潤してきた。

吉野・熊野の山地への入り口にも位置する伊勢本街道の辺りは大峯山参りの道筋でもあり、弘法大師にまつわる伝承も多い。宇陀市榛原しんりょう自明の街道筋の山肌には、弘法大師爪書きの不動尊と伝えられる磨崖仏が描かれており、その左手にある不動堂は、お伊勢参り・大峯山参りの旅人へのお茶接待所があった場所である。

しばらく進むと、かつての宿場町高井で、古道はここからしばらく国道から別れる。集落内を進むとひととき異彩を放つレトロな建物に出会う。木造寄棟ドイツ下見板貼り建築の旧高井郵便局で、大正末期から昭和初期の建築といわれている。

道端の古い道標に沿って進むと、1781 年（天明元年）築の松本家など、旅籠、茶屋を営んでいた旧家が点在し、往時の名残を残す。

そして、古道沿いのこんもりとした杉木立は弘法大師ゆかりの「高井の千年杉」である。古い井戸の周りに植えられた 5 本の杉が融合し 16 本の支幹に分かれる巨木で県指定天然記念物である。

この先の津越辻で、古刹ぶつりゅう佛隆寺に至る道が別れるが、佛隆寺は県内最大最古といわれる「千年桜」が有名で、これも県指定天然記念物である。

津越辻を過ぎると、榛原区赤埴、諸木野、さら

国道 369 号線を縫うように伊勢本街道は進む。（曾爾村山粕宿）



御杖神社。御杖村には倭姫命にまつわる伝説が残る。

に奈良と伊勢間の最高地点石割峠（標高 696m）を越え室生区上田口へと山道が続く。上田口は奈良から 1 日の行程で、今はのどかな山里の風情であるが、かつては旅籠が並んでいたという。

そして、伊勢本街道は山粕峠越えとなるが、このあたりは、今は林間のさびしい山道となっており、ここを下った曾爾村山粕でようやく車が行きかう国道 369 号線に合流する。

曾爾村山粕は、初瀬から 6 里（約 24km）で、奈良方面からは 1 日目、大阪方面からは 2 日目の宿泊地となった宿場で、旅籠や問屋などの他、数々の店が並び大変賑わった。奥宇陀地域の中心的存在で、人形浄瑠璃芝居も行われ、三味線の音が聞こえたのは奥宇陀でも山粕だけであった。

山粕宿からは、いよいよ鞍取峠を越えて御杖村桃俣の宿場に至る。伊勢音頭で「お伊勢まいりしてこわいとどこか、飼坂、櫃坂、鞍取坂、津留の渡しか宮川か」と歌われた難所の一つであった。古道は林の中を行くが、今は国道が迂回する。

桃俣からは、国道と伊勢本街道の古道がほぼ並行していくつかの集落を過ぎ菅野に至る。菅野はかつての宿場町で、今は、御杖村役場や小・中学校が立地する村の中心地である。ここを過ぎると、古道は国道を離れてこつずえ神末の集落に入っていく。

神末の地名は、天照大神の御杖代として伊勢神宮の創建に関わった倭姫命が、ご神体を伊勢にお遷しする際、この地が大和の最東端であること



伊勢奥津駅前の伊勢本街道。



多気宿は、中世、伊勢国司北畠氏の城下町として栄えた。

から「神の末」と言われたことにちなむという。御杖代とは、神の杖代わりとなって奉仕する人、あるいは神の霊の依る人を表すが、倭姫命は、伊勢神宮の適地を求めて、文字通り杖をつきながら諸国をめぐる歩いた。その際、杖をこの地にわすれてしまったと語り継がれており、御杖村の村名の由来ともなっている。その杖を祀ったとされるのが御杖神社で、村内には、この他、倭姫命伝説にまつわる遺跡が数多く残る。

国道は、神末の集落を迂回する形となっているが、2004 年 7 月には道の駅「伊勢本街道御杖」が開駅した。駅内には、公営日帰り入浴施設「みつえ温泉姫石の湯」や地元の農林水産物や工芸品をそろえた直売所「街道市場みつえ」が建設され、村内産業・観光振興の拠点となっている。

### いよいよ伊勢国（三重県）に入る

道の駅の交差点で国道は伊賀方面からの 368 号線に合流し三重県津市三杉町に入る。伊勢本街道も並行して進むようになり、石名原宿、そして奥津宿に至るが、奥津までは、JR 名松線が通る。

その名の通り、名張と松阪間を結ぶ予定であったが、競合路線の開通等で、建設は伊勢奥津駅まででストップした。また、再三台風の被害を受け、2009 年の台風 18 号被害の際には、家城－伊勢奥津駅間は復旧が見送られバス代行となっている。

かつて、旅行者や物資の流通、林業などで賑わった奥津宿も、今はのどかな山里だが、かつての旅籠や問屋の建物に往時をしのぶことができる。

ここから難所の一つである飼坂峠を越えると多気宿に入る。古く南北朝時代から室町・戦国時代にかけて、伊勢国司北畠氏の城下町として栄え、かつての居館跡には北畠神社が建つ。また、伊勢と大和を結ぶ要路に位置することから、当時、伊勢本街道は軍用道路としても整備されたという。

そして、多気宿の東には、最大の難所、現在でも狭隘な九十九折の櫃坂峠（仁柿峠）が迫る。多気宿から伊勢まで、あと 11 里半である。

（伊勢街道編終わり 山城 満）